る一団が、玖馬の独立を計画して居た。彼によつて組織された遠征隊が一八八三年一クレオーレ Aguero に率ゐられて来島し、Puerto Principe 附近に拠つて永く此地方を不安にした。而も西班牙は何等根本的改革を断行するの意図なく、逆にまた九五年の叛乱を招いた。

主要産物は煙草、珈琲、砂糖。

一八七〇年西班牙の一県となる。

(Fernando Po, Annobon)

第三節　西アフリカに於ける若干の島

第三章　オランダの東洋に於ける植民地の発展

第一節　西印度会社の解散

ニュー・ネザーランドは、一六二三年最初の根拠地が置かれてこのかた、極めて重要なる植民地となつた。一六二九年急速に移住を促進するため、一種の封建制度ともいふべきパトロン制度を設置せることが、時を経るに従つて弊害を生みたりとは言へ、農耕並に貿易は確実に発展した。必需品に対する高税、役員の秕政と不正、近

接英植民地との抗争、北亜細亜人との戦争が、迅速なる発達を阻害したけれど、それでも煙草栽培は長足に進歩し、奥地・本国・並にブラジル・アフリカ・西印度に於ける会社領との貿易も年々増加した。

此の植民地の価値は常に英人の慾をそそつた。蘭・英両国干戈を交ふるや、一六五四年既に此地を奪取せんとしたが、平和成立のため之を果さなかつた。而も其の後米国に於ける英領のニュー・イングランド諸州との軋轢は常に断えず、ニュー・イングランド諸州は常にロンドンに向つて和蘭人の駆逐を要求した。英国政府は此の要求に応ぜざりしのみならず、一六六二年和蘭と講和し且つ同盟を結んだ。乍併蘭人排斥主義者は和蘭がブラジル及び西阿弗利加に於て敗れたるに勇気を得た。その首領は国王チャールス二世の弟にして王国アフリカ会社総裁ヨーク公であつた。公は政府に知らしめず、独力事に当るに決し、ロング・アイランド及び蘭領全部に対する特許状と軍艦四隻を国王に請ひ得て、一六六四年八月末ニュー・アムステルダム（紐育）に到り、九月六日之を降した。西印度会社は之によつて白人人口一万、年収四二、〇〇〇フロリンを算する植民地を失つた。

英人のこの暴行は再び蘭・英戦争を招いた。戦争中に西印度会社は黄金海岸の領地、並にトバゴ、サンユースタティウスを失つた。その代りゴレ Gorée、シーラレオンに於ける英国の根拠地、西印度の英領諸小島を取り、多数の英船を捕獲した。またスリナムを得たことは和蘭にとりて有意義であつた。当時西印度会社は此地に確乎たる足場を有たなかつた。一六五九年ブラジルより逃避し来れる猶太人移住地は仏人の為に破壊せられ、爾来英人が之を占領してゐた。一六六七年和蘭は此地を奪取して移住を開始した。一旦また英人に奪回されたけれど、ブレーダ平和によりスリナム、トバコ、聖ユースタティウスは和蘭の手に帰した。其の後一六七二年英・仏戦争中和蘭は、紐育即ちニュー・アムステルダムを奪回したが、七四年ウエストミンスター平和に於て之を英国に還

付した。而して此年西印度会社は解散し、和蘭は米洲及び阿弗利加の発展を断念した。

第二節　東印度会社支配の拡張

米洲並に阿弗利加に於て失へる和蘭は東洋に於ける発展によつて自ら慰めた。一六四六年初、爪哇に於ける和蘭は米洲及び阿弗利加の発展を断念した人最大の敵マタラム王ハグン Soesoehenan Hagoeng 死し、マンクラット Soesoehenan Mangkoerat 位を継ぐや捕虜の交換を条件として和蘭と和議を結んだ。是に先ちてバンタムとも友好条約が結ばれたので、東印度会社は初めて軍事行動を廃して産業貿易の発展に力を注ぎ得るに至つた。東印度会社は先づ社員の私貿易を根絶し、競争者を圧迫して、収益を増すに努めた。そのためモルッカ諸島丁香樹は引継ぎて伐採され、土人の必要、風習等を全く無視して其の貿易を絶滅した。蓋し当時会社の収益は其の高率の配当に拘らず甚だ大ならず、印度貿易によつて大なる利得を挙ぐる必要に迫られて居た。蘭領印度の全組織は之に応ずるやうに編成された。総督の権能と責任とは次第に拡大された。個々の問題について十七人会議の同意を要し、また印度会議の同意をも必要としたけれど、実際に於ては独裁君主の如く独断専行するを得た。

印度会議は六名の普通議員、二名の員外議員より成り、総督並に会議は赦免権を有してゐたが、一般司法事務は司法会議の手にあり、その議員は同じく十七人会議之を任命した。社員の進級順序は次のようである。初め見習として欧羅巴より送られ、記帳方、下商売方・商売方・上商売方となる。重役及び知事は概ね上商売方である。下級社員は結婚を禁ぜられる。印度婦人は欧洲に伴ふを得ない。給料は極めて薄かつた。白人の移住は阻止され独り貿易のみならず農耕さへも曰人移住者に妨害した。彼等は支那人及び有色人の移住を歓迎した。

会社は二千乃至三千の常備兵を置き、常に欧洲より欠員を補充した。風土の為に病死するもの多かつたので、土人軍隊をも編成し、日本人・バリ人 Bali・マカッサル人・アムボイナ人等を傭兵として使用した。諸港間の連絡は小船又は土人船によつた。大船は常にバタヴィアに出入した。会社が印度に差向ける船舶は一六四〇——五〇年には毎十三——二十一隻であつた。船舶の使用に関する規則が一六五〇年制定された。之によれば社員は私有品を回送するを得ない。帰国に際しては財産を会社に委ね、引替手形を交付される。印度より書面又は物品を私人に送るを得ない。一切の通信は会社当局の手を経る。会社は是くして社員並に植民者の貿易を禁じ、新競争者の出現を阻まんとしたのであるが、その目的を遂げることは到底不可能であつた。

さて印度に於ける平和は続かなかつた。錫蘭ではカンディ王と衝突し、多くの蘭人が捕へられ、一六四九年漸く収まつた。一六四八年にはアムボイナに、五〇年にはテルナテに叛乱が起つた。共に和蘭が丁香樹を伐採して島民の生業を奪へるによる。この叛乱は大なる努力の後に鎮定され、五二年テルナテ王は年額一四・〇〇〇リイクスダールデル Rijksdaalder の支払を受けて島内の丁香樹を絶滅することを承知した。五三年バトヤンとも同様の条約結ばれ、其後三年間に其他のモルッカ諸島の丁香樹も伐採し尽された。島民は武装を解かれ、危険人物は所罰せられ、強制的に基督教が宣伝された。貿易は奪はれ、苛税を徴せられ、無賃労役を強いられて君主も島民も頓に疲弊し衰弱し果てた。六二年には西班牙がテイドールを撤退したので、和蘭は全くモルッカ群島の主人となつた。

一六四八年一蘭船が喜望峰附近で難破して上陸し、此地が牛羊に富み、野菜繁茂するを見、帰国の後東印度会社に向つて此地に補給港を設くべしと勧めた。会社は此の勧告を容れ、植民地経営の事を識見あり才腕あるリー

ベック Joan van Riebeeck に託した。リーベックは五二年四月喜望峰に着し、直ちに堅塁を築き、野菜園を作り、牛羊を購入し、幾多の困難と戦ひて会社のために重要なる領土を獲得した。蘭船に十分なる食料を供給し得たるのみならず、葡萄酒を産し、奴隷及び家畜を供給し、また印度人の流刑地として役立つた。已に五七年、会社の在留地以外最初の自由植民地建設せられ、次で山を超えて奥地に同様植民地が出来て行つた。ナント勅令の後会社は和蘭に逃避せる多数の仏国新教徒を此地に送り、植民地繁栄の基礎を置いた。

第三節　台湾の喪失

一方和蘭人は錫蘭島に於てカンディア王シンハ Rajah Singha van Candia と同盟して葡国人の駆逐に従ひ、一六五六年春、百五十年以来占領し来れる葡国人よりコロムボを奪取した。次で印度本部に於ても、五八年メーガパトナム Megapatnam を、六一年コイラン Koilang 及びクランガノール Krangano を、六二年カリカットも和蘭に帰し、ゴアも危く見えたが、皇帝の援助の下にコーチンを葡国より奪つた。次でカナノール Kananore を、六三年錫蘭を中心とせる肉桂貿易を独占し、南印度の胡椒貿易を支配することになつた。

瓜哇に於ては和蘭の横暴が再びマタラム王及びバンタム王の敵意を煽り、一六五六年マタラム王は諸港を閉ぢて米の輸出を禁じ、バンタム王は蘭船を掠奪し、バタヴィアの周囲を荒らした。此際多数奴隷の逃亡ありて会社は二重に損害を蒙つたが、まづバンタム諸港を封鎖して之に報復し、遂にバンタム王をして和を請はしめた。ま

たセレベス島マカッサルは英・葡両国と貿易を営めるのみならず、当時南洋回教の中心地として常にモルッカ諸島を援助してゐたので、和蘭は一六六〇年突如マカッサルを襲ひ、思ふが侭の条約を承認せしめたるのみならず其後も再三征討を繰返し、六九年には全セレベスの主人となつた。

スマトラではた五九年パレンバン Palembang のサルタンが、商船を襲えるを機会に比叡を占領し、堅塁を築き、此地の胡椒貿易を手に入れた。六二年には従来通商関係を結び来りし西岸諸酋長を保護の元に置いた。外国勢力の侵入を欲せざるアトイのサルタンが此等の酋長を攻めんとするや、蘭軍之を破つた。かくてスマトラに於ける勢力は次第に伸びた。更に六〇年ボルネオ島バンジェルマシン Bandjermasin の酋長と条約して胡椒貿易を独占した。

但し和蘭は一六二四年に占領せる、支那海の貿易に極めて重要なる台湾を一六六一年に失つた。台湾の支那人は夙くより和蘭人を駆逐せんとしたが、常に蘭人の為に抑えられた。満洲人の支那征服後、台湾に土着せる一支那人が、有力なる海賊の隊長となつた。清朝は甚だ彼を厄介視し、彼を除去し、其の船隊を抑えた。其子国性爺は台湾を略取し此を根拠として満洲人と戦はんとした。此噂伝はるや蘭人は急ぎバタヴィアに救援を求めた。総督は十二隻の船を台湾に派したが、艦隊司令官は何等危険なしとして四隻の船と若干の兵を残して台湾を去つた。その去ると同時に、一六六一年四月、国性爺は二万五千の兵を率ゐて来り、抵抗を受けずして上陸した。支那人は皆之に味方した。和蘭人の要塞は幾くもなく最も堅固なるゼーランディア Zelandia を除く外悉く陥落した。バタヴィアは此の報道に驚き十隻の船に七百の兵を載せて台湾に急派したが、一六六一年八月ゼーランディアに現れたけれど、風雨のために上陸し得ず、其後四週間の後再び上陸を試みて撃退され、空しくバタヴィアに

帰つたのでゼーランドは降服し、蘭人は台湾を去らねばならなかつた。一六六三年十六隻の艦隊を以て清朝と協力して此島を奪回せんとした。然るに清朝は自ら此島を征服せんと欲したので、此の遠征も思止まらねばならず和蘭は遂に台湾を失つた。

第四節　仏国との紛糾

爪哇に於ける和蘭勢力の伸展は台湾の喪失を償ふに足りた。一六七五年マツラに逃げ来れるマカッサ人がマタラム国を襲ふや、マタラム王は宿敵和蘭に援を乞ふた。会社自身も常にマカッサルの海賊に苦しんでいたので、総督は其の請に応じたが、王は高い代価を払はねばならなかつた。即ち王は一六七七年の条約によりクラワン **Krawang** 河を会社領の東境と認め、全マタラムに於ける関税免除を約束したる外、軍費として二十五万リイクスダーデル **Rijksdaalder** 及び米三、〇〇〇荷を軍費として支払ひ、又ヤパラ出張所に堡塁を築くことを許し、且つ守備兵の経費を負担することとなつた。而もスペールマン提督 **Admiral Cornelis Speelman** の率ゐし蘭軍は、時に敵を敗りしとは言へ、山中に拠れる敵を如何ともし得なかつた。マタラム王は逃亡して途上に死去した。その四子が王位を争つた。スペールマンは長子を援けて王位に上らしめ、曾に父王との条約を承認せしめたるのみならず更に大なる利益を提供せしめた。即ちクラワン河より東端までの全海港が戦費に対する担保として会社に委ねられ、バタビア領域はパマヌカン **Pamanoekan** 河まで拡げられ、会社領内のマタラム人は和蘭の法律に服することとなれる外、一六七八年にはサマランが会社に譲渡された。八十年代にはジャカトラ・クラワン・チャンヂョル **Tjiandjor**・チェリボン **Tjeribon** が蘭領となり、マタラム王は全く無力となつた。

一六七一年秋、仏国艦隊がド・ラ・エイ大佐 Uberst de la Haye に率ゐられてマダカスカルから印度にに現れた。目的は錫蘭及バンカに仏国の根拠地を置くにあつた。而して和蘭東印度会社の領分に進出を試みるに至つた。多年和蘭会社に勤務せるカロン Caron が、此の事業に参加したので、その成功が期待された。カロンはまず丁抹領なりしトランクバル Tranquebar の買収をルイ十四世にすすめ、次でカムバヤ Cambaya 湾内のサンドロカル Sandrocar 島占領を、最後に錫蘭征服をすすめた。和蘭にとりて幸なことには、仏人の多くがコックよりの成上り者カロンを信用せず、仏国会社はマダガスカルに再々失敗して経費に窮してゐた。（その間諜とはカロンだと仏人は考へてゐた）仏国の事情を知悉した。一六七二年三月仏人が錫蘭島トリンコノマレ Trincomale 湾に現れし時、蘭人は既に此地に堡塁を築いてゐた。ド・ラ・エイはよつて隣接コテアリ Cotéary 湾内の二小島を占領し、カンディ王と交渉を開始した。曽て葡国人を悪める如く、今は蘭人を悪む王は、仏国にトリンコノマレ及びカンディの割譲を約した。ド・ラ・エイは和蘭の抗議を無視し、堡塁を築きて恒久的計画を立て、トランクバルより糧食を仰いだ。

一六七二年五月和蘭提督グーンス Ryklof van Goens が有力なる艦隊を率ゐて来航したので、ド・ラ・エイは衝突を避け、小守備兵と二隻の船を残し、僅か以前に葡国が撤退したばかりのコロマンデル海岸サン・トメ San Thomé に赴いた。此町は広濶なる沃野を管制し、いずれの国も領有権を主張せず、ゴルコンダ王に属していた。然るにゴルコンダ王は蘭・英両国の支援の下に仏人を攻撃した。ド・ラ・エイは此地を占領して前者の喪失を償はんとしたが、七三年に至り錫蘭の根拠地は既に和蘭に奪はれたので、ド・ラ・エイは二回とも之を撃退したが、和蘭艦隊来船して海陸よりサン・トメを攻めた。仏人勇敢に戦つたが遂に力尽き七四年暮此町を撤退せねばなら

なかつた。

第五節　瓜哇に於ける諸戦争

印度に於ける成功は、欧洲に於ける和蘭の国威を高め、英、仏両国の攻撃に対抗するを得せしめた。ブレーダ平和に於いては、和蘭貿易の打倒を主目的とせる英国の一六五一年の航海条例を、蘭船に適用せしめぬこととした。此の戦争に於て会社は軍艦並に軍費を以て国家を助け、国民は会社の営業が極めて好成績を挙げつつありと信にて無限の信用を払つた。而も実際に於ては収支償はず、一六七六年の如き、印度に於ける支出は、収入を超ゆること実に百万グルデンに達した。会社は之を絶滅するために全力を注ぎ、植民者の生産を絶対に農業に制限し、貿易に帰し、之を飽くまで独占を遂行せんとした。但し員外印度会議議員ホールン **Pieter van Hoorn** の如きは之に賛成しなかつた。彼は会社の独占制度並に迅速なる利得の追求が却つて会社の営業を不成績ならしめるものとし、眼前の利益をのみ追ふ商人は決して植民地を建設し得ずと公言した。そのためには年月と忍耐とを必要とする。葡国人が植民地を失へるは、植民し得る以上に多くの場所を求めたからである。会社が移民を奨励せず之を阻止するは、同様の誤謬を繰返すもの、バタビア貿易は之を開放するを可とすとした。この意見は十七人会議の喜ばざる所で、ホールンは一六七九年召還された。会社の財政状態は年々窮境に陥つたけれど、その有する大なる信用によつて難関を切抜け、一六九六年には三百万グルデンを政府に収めて特許期限を一七〇〇年より向ふ四十箇年延長した。従つて社債は益々殖え一六九八年には一千一百万

第十七世紀末年に至り英国の海上権は漸く和蘭を圧倒するに至つた。会社の営業は之がために少なからざる影響を蒙つたのに加へて、爪哇に於ける絶え間なき戦争が支出を大にした。マタラムの戦争について、バンタム王アグン Sultan Agoeng は和蘭の進出が自国の存立を危くするに至るを見、爪哇・マラッカ・スマトラ・モルッカ群島に於ける和蘭の敵を援助し、殊にバタヴィアを背後地より断ちて東爪哇に至る路を開かんと努めた。

然るに老王の子にして摂政なるハッジは、和蘭との戦争を欲しなかつた。和蘭は之に乗じて老王が彼を廃して位を小弟に譲らんとすると告げて反感を煽つた。其の間老王は常に敵対行動に出るので、和蘭は海陸より軍を進めハンタムが頑強に主張するチエリボン附近を占領するに及び、ティルタヤサ Tirtajasa にゐた父王と、バンタム内に遁逃して援を乞ふた。然して王子の軍隊が一六八二年叛乱を起したので、王子は城に政務を見てゐた子王との間に烈しき争が起つた。

総督スペールマンは、アグン王の勝利が重大なる影響を他に及ぼすべきを慮り、海陸より援軍を派したので、一六八三年には之を降した。之によつて全爪哇が和蘭の勢力の下に立つこととなつた。之は実に大なる収穫であるけれど、之より来る利益は除ろなるが故に、会社はまづ之に要せる巨額の軍費に苦しんだ。且つ其後も戦争が常に繰返されたので会社は其の獲得せる帝国の貿易並に経済的発展に用ふべき力と資本とを欠いた。遠隔の地に於ける官吏の着服、並に土人君主等が阿片吸入を止め初めたので阿片専売収益の減少が、一層収入を少くした。例へばチエリボンでは四個年半の間に、信すべからざる苛税を土人から徴収し乍ら一四七・〇〇〇フロリンの欠損となつてゐた。之を防止するために会社は百方苦心したけれど殆ど効果なかつた。

第十七世紀の最後の十年代に於て、会社の収入は貿易独占区域の大膨脹、砂糖其他の農産物の増加に拘らず常に少く、一六八一——一七〇六年のうち、十九個年は収支償はなかつた。それだのに高率の配当を払ひ、信用は依然として大に、前述の如く一六九六年には三百万グルデンを支払ひて特許期限を延長したのだから不思議である。かかる事情の下にバタヴィア当局は新しき紛糾を避け平和の間に経済的発展を計らんとしたのであるが、事実は会社を常に新しき戦争に駆つた。即ちマタラムに於ては先王の子デパティ・アノム Depati Anom 即位するに及び、一七〇三年先王の条約を解消し、和蘭と関係を絶たんとした。然るに彼に逐はれたる叔父パンゲラン・プーゲル Pangeran Poeger がサマランに現はれて和蘭の援を乞ふた。一七〇四年後者は和蘭の援軍を得てマタラム王と宣言したが、会社は無条件降服を要求し、之に従はなかつたので国外に逐はれ一七〇五年パンゲラン・プーゲルが王位に即き、和蘭の要求する通りの条約を結んだ。デパティ・アノムはマランの君主 Soerpati van Malang に援けられて和蘭に抗したが、後捕へられ、囚人として錫蘭で死んだ。

第六節　瓜哇に於ける珈琲栽培開始

瓜哇に於て新に利益を得たるに拘らず会社財政状態は依然不良であつた。従前の原因は除去されない上に、英国が新進の勢を以て盛に競争を企て、英船は屢々瓜哇にも現れて阿片を輸入し、社員及び土人の密貿易を使嗾した。総督ファン・ホールン Van Hoorn は支那船を瓜哇に招致して貿易を営み、且つ珈琲栽培を奨励したが、之より生ずる利益は多端なる戦費を償ふに足りなかつた。東印度に於ては英国が次第に和蘭の勢力を駆逐し始めた。セレベスにも兵を用ゐねばならなかつた。モルッカ群島並に西スマトラにも同然であつた。但し一七一三年ジョ

ホール王から東スマトラのシィアック Siak を譲渡され、全ジョホール貿易を会社に開放せしめ、阿片専売権を得た。

瓜哇の不安も尚ほ息まず、一七一二年以来スラバヤ其他三の土人君主が、マタラム王に叛し、王は援を会社に求めた。当時会社は日度に於て、堡塁建設の事よりカリカット皇帝と事を構えてゐた。また一方支那との間にも紛争があつた。それは一七一七年会社はバタヴィアに於て、一ピコル六十クーラーの支那茶に対して四十ライヒスターラー Reichstaler しか払はなかつたからである。それにも拘らず、一七一八年兵をマドラ及びスラバヤに派し、幸に叛乱を鎮めたが、戦闘年余に亘り多大の戦費を要した。

次いでバタヴィアに大事が起りかけた。白人と瓜哇婦人との混血児にしてバタヴィアの財産家なるエルバーフェルド Pieter Erberfeld が多数の土人を説いて陰謀を企て、一七二二年元旦を期し、白人を襲ひて尽く之を殺さんとした。陰謀は偶然前年暮に官憲に知られ、死刑に処せられしもの四十九人に及んだ。これで暫く平和となつたので、総督ツワールデクローン Hendrik Zwardekroon は財政改善に力を注ぎ給の積卸の際に行はるる盗難、社員の密貿易を制止し、一七二二年四月には之を犯せる者廿六名を死刑に処し、其の他を投獄した。また製糖及び珈琲栽培を奨励した。

珈琲栽培の発達に連れ、それだけ多くの利益が土人君主の手に入つた。之を阻止して同時に会社の利得を増す為め初め一ピコル（一二五封度）は一〇ライヒスターラーなりしを、一七二六年未払分の価額を九ライヒスターラーに値下し、且つ将来会社所有地内よりの珈琲は五、其他は六ライヒスターラーにて買取ることとした。この処置は珈琲栽培の発展を阻止した。会社は土人に向つて荐りに新樹の栽培を勧め、在来のものを廃棄せしめるよ

う監督するに骨折つた。ジャカトラではヒスターラーに値上する必要を見た。それでも会社は競争と独占権侵害とを恐れて自己の権力の絶対に及ぶ土地以外には珈琲栽培を禁じた。曾てモルッカで丁香樹に対してなせる如く、一七三五年マタラム王国内の珈琲樹は、一七三三年の条約に基いて伐採された。一七四〇年には珈琲産額を四百万封度と定め、チェリボン百五十万、プレアンガー及びジャカトラ二百五十万封度と割当てた。

第七節　支那人叛乱

此頃に至り社員の腐敗は漸く甚だしくなつた。セイロン知事は白人並土人に対して残虐なる行為あり且つ私政甚だしきを以て、一七三〇年バタヴィアに送られて死刑に処せられた。マラッカ知事は英人と共謀して多量の阿片を瓜哇に密輸した。瓜哇の一知事は米価を釣上げて土民を餓死させた。彼自身は之によつて年々二十万ライヒスターラーを儲けた。社船は以前よりも社員の私商品に満ちた。バタヴィアの最高社員等が恥ぢる所なく情実と収斂を敢てした。それがため一七三一年には総督・総務理事其他の最高社員が突如召還されたことあつた。総督もその影響の下に立つた。三歳になる社員の幼児が、役員名簿にのせられて俸給を貰つてゐた。

かかる間にも瓜哇に於ける会社の勢力は益々伸び、一七三三年にはバンタムの年若き王と条約して、胡椒貿易の独占権を握り、一切の外人との通商を禁じた。これを遂行するため、一七三八年にはツロン・バワン Toelong Bawang に一堡塁を築く権利を得た。またバンジェルマシンでも一七三三年胡椒独占権を得た。同年幕マタラム王は会社への未払金支払と年々米一、〇〇〇ゴジャンの交附と、サラマン及びヤパラ両堡の修理を約束した。か

かる時に恐るべき支那人の叛乱が起つた。

支那人はバタヴィアの内外だけでも十万を算した。他の蘭領植民地に於ても同様多数であつた。甘蔗栽培並に製糖業は概ね彼等によつて行はれた。而して多く自国人を労働者として使用した。初め蘭人は彼等の入国が農業並に商業を促進するので喜んだが、後には其数余りに多いのと、その活動とに不安を感じ初めた。支那人のうちには数千の浮浪人乃至盗賊あり、また密貿易に従ふ者も多かつた。それで蘭人は彼等の入国阻止を計り、まづ如何なる船舶も支那人百名以上を瓜哇に乗せ来るべからずと命令した。それが何の効果もなかつたので、次には支那人に滞留許可証を交付することとし、之を所有せざる者をケープ植民地に追放することとした。また密貿易禁止のために支那人の宿屋並に飲食店営業を禁じた。

此等の規則は厳重に行はれたのみならず、社員の金儲けにも利用された。而して支那人の不平は、若干犯罪人が、従来は絞刑であつたのに今や酷烈にも杙で貫いて死刑に処せられたので、一層昂まつた。加ふるに船で送られる支那人は喜望峰にも錫蘭にも連れて行かれず、実は海中に投入れられるのだといふ噂が信じられた。多数の支那人が山中に免れて蹶起の用意をした。一七四〇年九月末、三名の支那社員が、暴動の危険迫れることを総督ファルケニール **Andrian Valkenier** に告げたので大に驚き、夕七時印度会議議員を召集して之を諮つたところ議員等は支那人の平生から推して、あの柔順な平和人種に左様な乱暴な計画はあるまじとの意見であつたので、支那人の有力者を厳重に監視する位の処置しか取らなかつた。ファン・イムホーフ **Van Imhof** の率ゐる総督の反対議員等は、之を以て彼等の注意を他に向けんとするための作事だとした。十月一日一千の支那人が、武装して現れたといふ報告あつた時も、彼等は依然其の考を棄てなかつた。十月五日に至り、更に支那人の大群現れ、

一軍曹を殺したとの報道によつて漸く態度を更へた。バタヴィアの外哨の守備を厳にし、且つ議員イムホーフ及ファン・エルデン Van Aerden を事情調査のために派遣することになつたが、未だ発せざるに先ち、前清皇帝の落胤と称する叛軍の将より、バタヴィアに於ける支那人甲比丹に宛てたる書翰届き、バタヴィア攻撃を宣言して来た。於是初めて真剣に対策が講ぜられ、まず支那人の女子並に小児のバタヴィア退去を禁じ、バタヴィアに来る支那人にして武器を棄てざる者は悉く射殺を命じ、七時以後は一切の支那人家屋を閉鎖し、且附近の支那群を攻撃した。此等の手段は何等の効なく、十月八日支那人の大衆バタヴィアに進撃し来り、その外哨を攻めて失敗したので、附近の家屋に火を放つた。総督は市内に於ける多数支那人が呼応して起つことを恐れたが、暴民は支那人家屋を襲ひて之を焼き住人を殺した。暴動は三日に亘り、家屋の破壊せらるるもの六百、約一万人殺された。総督の指図で監獄及び病院内の支那人も殺された。戦場に在る支那人に対しては首一つに二ドカットの懸賞がついた。虐殺掠奪八日の後、バタヴィア市内に支那人の影を絶つた時、印度会議は、一個月以内に帰順する支那人を大赦することにした。而も武器を執れる支那人の降服するもの殆どなく、小戦闘が続けられたが、雨期に入りて内地の往来不能となるに及び暫く小康を見た。

同時に長い間反目して居た総督と印度会議とが一層激しく相争ひ総督はファン・イムホーフ外二議員を拘禁し数週間の後囚人として本国に送つた。この処置を非難した他の両議員も逮捕された。会社内の此の葛藤が支那人に勇気を与へ、一七四一年早春より、マタラム国内の諸地が支那人の攻撃を受け、若干の蘭人移住地も破壊された。瓜哇人は支那人に好意を示し、若干君主は公然彼等に味方した。七月にはカルタスラ Kartasera 及レムバン Rembang 彼等に帰し、サマランは包囲され、スラバヤも脅威された。会社が共力を求めしマタラム王は態度

曖昧であつた。

総督は全力を挙げて鎮定に従ひ、東海岸に於ける軍隊の指揮を有為なるフェリッセル Hugo Veryssel に託した。彼は先づサマランの包囲を撃退して敵の勇気を挫いた。且つマタラムの支配を脱せんとして会社に与せるマヅラ王が、支那人に加担せる爪哇軍を方々で破つたので、一七四一年暮再び会社の味方となつた。然るに支那人と協力せる彼の臣下が蹶起したので、王はカルタスラより逃げ、沿海諸州全部の割譲及摂政の任命を条件として会社の援を求めた。マヅラ王が敵を敗北せしめて此町を奪回したが、之を和蘭に交付したので、一七四二年暮マタラム王が帰るを得た。これで最大の危険は去り、叛徒は次第に屈服した。此間総督の更迭あり、一七四一年十一月ファルケニール召還され、彼の敵イムホーフが之に代つた。ファルケニールは途中喜望峰よりバタヴィアに送還され茲で裁判に附せられたが、未だ終らざる前に獄死し、六百万グルデンと称せらるる財産は没収された。

第八節　爪哇征服開始

ファン・イムホーフの仕事は支那人叛乱の善後処置を以て始められた。その第一はマタラム王との交渉である。一七四三年十一月十一日の条約により、マタラム領土は内地の小区域に限られ、摂政及び海岸地帯の政務官は会社に忠誠を誓ひ、会社之を選任することとなり、貨幣鋳造権、鉱業独占権をも会社に与へたので、爪哇全部が殆ど会社の手に帰した。

但し爪哇官吏の中には此の新政に服せず、会社への忠誠を誓ふを肯んぜざるものありて、事態また紛糾せるに

加へて、マドラ王は会社に臣事するの意なく、公然兵を挙げて会社に反抗したので、之が征討に苦心したが、一七四五年遂に敗れてボルネオ島バンジェルマシンに亡命し、此処より英船に乗じてベンクーレン Benkoelen に至らんとする途上蘭船の為に捕へられ、王は喜望峰に、二王子は錫蘭に流された。但し叛乱に加はらざりし他の二王子を旧マドラ王領の政務官に任じて之を分治せしめたが、両人とも会社の高級社員と異なる所なかつた。

一七四六年ファン・イムホーフは自ら島内を巡視して各種の調査を行なった。四七年にはブイテンゾルクを建設して欧人の保養地、総督府の夏期処在地とした。但し彼は其の欲せる平和的事業を長く続けることが出来なかつた。それはマタラム王の弟及び甥が、叛乱を起したからである。小競合を続けて勝敗決せぬうち、一七四九年、王の嗣子が王の一夫人と恋愛関係あるを憤りて、王は其国を会社に譲渡した。会社の代理者ファン・ホーヘンドルフ Van Hohendorff は片目のため回教法律に牴触する王子を王位に即かしめた。然るに叛乱中の叔王マンク・ブミ Mangkoe Boemi は自ら王と称し、多くの味方を得た。ホーヘンドルフは、マンク・ブミの甥を王位継承者に定め、之を味方とせんとしたが、彼は直ちに王位に即かんことを欲したので、戦争は続行されホーヘンドルフは辞職した。土人の間に人望ありしニコラース・ハルテイング Nikolaas Hartingh 之に代り、土耳古人及びアラビア人教師の仲介により、其甥マス・サイド Mas Said と不和なるマンク・ブミと妥協するを得た。彼は蘭人と共にマス・サイドを攻めた。一七五五年初めに至りマンク・ブミはマタラム王と和解し、マタラムの中に封ぜられる条件のドに会社と和した。マス・サイドは更に小戦を続けていたが、一七五七年三月降参したので、之にも小さき封土を与へた。かくてマタラムは今や三人の君主によって治められることになつたが、三人とも会社の封侯にすぎず且つ互に抗争して止まなかつた。

と前後して会社はバンタムでも利する所あつた。一七四七年会社はバンタム王妃の希望により、タンゲラン Tangeran の領域並にトラン・バワン Toelang Bawang 砂金収獲の半を割譲する条件の下に、廃して王妃の甥を太子とした。同年老王精神病となつたので、王妃摂政の位に即かんとしたが、人民の王妃を喜ばざるもの起つて叛した。総督は王妃並に其の甥をバタヴィアに送り、正当の太子を錫蘭より召還したが、その帰着に先だち叛乱鎮定し、一時摂政の地位に即ける王族の弱き、人が王位に上つた。かくてバンタム王もまた会社の一封侯たるに至つた。

ファン・イムホーフは斯くの如く会社の政治的勢力を拡大すると共に、会社内部の改革を企て、精細なる改革案を会社に提出したが、多く実行を見るに至らなかつた。会社は国際政局の紛糾と共に多事多難となつた。英人はバンジェルマシンに拠り、爪哇人に武器を供給した。モルッカ群島並にスマトラに於ても、土人との争闘は絶間なかつた。一七五七年マラッカがリンギ Lingga 附近の海岸に移住せるブギン Boeginezen 人に囲まれて遠征軍を出した。印度大陸に於ける社業も英・仏戦争のために苦しんだ。その船舶並に堡塁は屢〻其の余沫を浴び土人君主に対する威厳を失つて行つた。波斯湾の出張所も困難に遭遇したが、それでもカリーク Karek 島によつてバスラ Bossura ブシール Buschir と貿易を続けた。

喜望峰も思はしくなかつた。ケープタウンは補給港として重大なる価値ありしも、会社は之が発展に力を注がなかつた。十七世紀末葉その支出は十六万マルク、収入は十万マルクにすぎなかつた。ケープタウンは補給港として重大なる価値ありしも、会社は之が発展に力を注がなかつた。十七世紀末葉その支出は十六万マルク、収入は十万マルクにすぎなかつた。十八世紀には収入十六万マルクに達したが、支出が廿万マルクとなつた。ユーゲノットの移住あり、五穀並に葡萄栽培の好結果に拘らず、植民地は苦境に立つてゐた。薄給なる社員はあらゆる商売を営んで金を儲けんとした。労働力が不足した、土人

の反抗に苦んだ、役員の不正に難儀した。印度・和蘭間の補給港でなかつたら、疾く之を棄てたであらう。蓋し会社は、喜望峰にもその独占慾を発揮し、植民者が相互に交易し、又は此地に欠乏せる木材購入の為に自ら船舶を艤装するを禁じ、植民者の取引並に耕作を妨ぐる重税と、繁瑣なる手続とを定め、之によつて自ら利せんとしたが、そのために自らも利せず植民地の発達をも妨げた。

第九節　東印度会社衰微

十八世紀に於ける会社の領土拡張は、従前の『統治者たるよりも商人』なりし会社の性質を一変して、今や『商人たるよりも統治者』たるに至らしめ、その支出の莫大によつて経営を困難ならしめてきた。加ふるに和蘭の国威衰えるに従つて、国家の会社に対する誅求が大となつて来た。

十八世紀に於ても営業の方法は以前と大差ない。印度より将来せられたる貨物はニクツク及び丁香を除き、毎年二回アムステルダムの『東印度館』（Oost Indische Huys）に於て競売に附せられた。其の売上高は千二百万——二千万フロリンの間を上下した。初め会社は綿布麻布を東洋に輸出し、之を香料と交易して二重の利益を収めんとしたが、被服の需要少なく、且つ家内工業として廉価に麻布綿布を紡織しうたる東印度諸島民に向つて紡織機械発明以前の欧羅巴が之と競争し得る筈なかつた。故に会社が印度に輸出したるものは、主として東洋在留欧人の需要品、並に土人好奇の対象たる装飾品に限られ、会社は之に対して法外の高価を要求したけれど、一年最高三百万フロリンを超えなかつた。香料に対する支払は主として金銀貨を以てなされ、十八世紀末葉には銅貨の価値が欧羅巴のそれに倍せるより、銅貨を以て支払の方針を採つた。社船は普通毎年三回印度に派遣された。

優秀なる船員の欠如と、社員の違法売買の目的たる貨物の過多なる積載のために、船舶は帰航に際して屢々沈没した。

営業の中心はバタヴィアで、錫蘭を除き一切の東洋貨物は一旦バタヴィアを経て本国に輸送された。こは明白に時間と経費に於て甚だ多くを失ふものであるが、会社はこによつて貿易独占を確保し得ると考へた。輸出貨物は土人君主より分担額として無代で、並に一定の価格で手に入れた。例へば珈琲一二五封度一ピコルに付き六ライヒスターラーと云ふが如し。而して此際社員は一ピコルを一八〇乃至二四〇封度として土人から搾取してゐた。

瓜哇についではスマトラが重要領土であつた。西岸の主要港はパダン（Padang）東岸のそれはパレンバン（Palembang）であつた。前者は英国との競争あり、後者は支那人及ブギン人の密貿易に悩んだ。マラッカは昔日の価値を失ひ、軍隊駐在地たるに止まつた。ボルネオとの取引は少なく、バンジェルマシンよりの胡椒は支那人の仲介によつた。セレベスから僅に貴重木、燕巣、並にバンダ諸島向けの奴隷を手に入れた。モルッカ諸島はその丁香の産出によつて依然大なる利益を会社に与へた。丁香樹林は各一二五本づつ四千区に分たれ、一樹平均二二・五ポンドを産した。一〇ポンドに対して会社は四八ストイヴァー（一部は貨物で）を払ひ、概ね一ポンド十三ストイヴァー Stuiver で売つた。バンダ諸島の欧洲移民は全く会社に死命を制せられ、その産出せるニクヅクを会社の提供する生活必需品と交換せねばならなかつた。

錫蘭もまた重要で、会社の毎年販売せる肉桂は約三百五十万フロリンであつた。島の統治は主としてカンディア王 Maharaja van Kandia に委ねた。テュティコリン Tutikorin の真珠採取は年額十万フロリンで賃貸した。

東印度大陸の多くの出張所は、英国勢力の進展につれて衰へた。後印度ではシャムとだけ通商した。支那・日本

との貿易も大でなかつた。波斯貿易はその不安なる政情の影響を受けた。アラビアとの通商は瓜哇に多量の珈琲を産するに至つて衰へた。

かかる間にベンガル王ミル・ジャッフィル Mir Jaffir は、英国の影響の下に和蘭出張所に対して種々なる妨害を加へたので、一七五九年会社は一船隊を派遣した。船隊は英人の目を眩ますため先づナーガパトナム Nagapatnam に寄港したが、其の為に英人に対抗準備の時日を与へた。英人のすすめによりミル・ジャッフィルは、恒河の航行、軍隊の上陸を禁じ、同時に恒河河口を防備した。十月和蘭船隊此地に来航するやグスタヴァス Gustavus 堡との連絡を断たれたるを以て無為に三週間を費し、漸く溯江して七百の欧洲人と八百のブギン人を上陸せしめた。然るに英国人は船隊を攻撃して之を降し、和蘭人をしてその要求を容れしめた。即ち和蘭出張所は英国の監督を受け、阿片と硝石のみを買ふべく、また土人の政治に干渉せぬこととなつた。和蘭が印度より総退却することは確実となつた。セイロンではカンディア王と紛争を生じ、王は英国の援助を求めたけれど、一七六五年之を降し、一切の沿海地帯と肉桂林とを譲渡せしめた。

瓜哇の戦争も止まなかつた。群島各地にも暴動が起つた。会社はそれらの鎮圧に忙殺された。其間和蘭の貿易は次第に減退して英国の貿易が増進して来た。密貿易も益々盛んになり、会社が講じたる一切の防遏手段は無効であつた。

而して会社の収入は既に述べたる如く支出に伴はず、会社の純益は年を遂ふて激減し、一七三〇年に於て、一六一三年より通算して既に七三三万フロリンの損失を見、一七八九年には同じく一六一三年より通算して実に八千五百万フロリンの損失を見ている。

第十節　東印度会社解散

米国独立戦争は和蘭を英国との戦争に捲込んだ。太守の反対党は公然米・仏に味方したので英国は一七八〇年遂に宣戦した。これは和蘭にとりて実に痛手であつた。陸海軍とも長く閑却され、会社は印度の防禦力の充実を怠つてゐた。必要なる海上権を欠いて居たので軍隊武器を印度に送ることも出来なかった。喜望峰には仏軍隊を送り、其他の植民地は之を植民地自身と仏艦隊の保護とに委ねる外なかつた。開戦の報は一七八一年六月バタヴィアに着いた。而も同時に迅速なる処置に出でず、一英船を悠々出帆せしめたので、該船は直ちにスマトラ島ベンクレーンに赴き、和蘭商館を掠奪し、貨物の損害五十万グルデンに及んだ。印度大陸ではコロマンデル海岸の中心地ネーガパトナムが海陸より襲はれて十一月降参し、同海岸の其他の商館、並にペンガルに於ける商館も悉く奪はれた。一七八二年セイロンに於ても英艦隊のためにトリンコノマレ Triconomale を奪取せられしが、仏国提督スュフラン Suffren 之を奪回した。瓜哇は幸に攻撃を受けなかつた。

会社は之によつて領土・貨物・船舶等の直接損失莫大なりし外、間接の損害また甚大であつた。三年間東洋との船の往復なかつた。瓜哇では現金を得るため高利の借金又は貨物の投売を行ひ、英人にまでも売らねばならなかつた。平和克復も更に幸福を齎らさず、ネーガパトナムは一七八四年英国のものとなつた。セイロンの肉桂貿易中心港トリンコノマレが英国の手に渡らずにすんだのがせめてもの慰めであつた。

戦争の経験は真剣なる改革の必要を知らしめた。植民地防備案も唱へられたが、会社は費用を惜んで実行しなかつた。仏国の印度植民地と提携せんとする計画は親英党の反対を受けた。且つ一七八五年仏国は埃及と条約を

結び、印度貨物を地中海を経て欧洲に輸入せんとし、一七八九年現にポンディシェリより豊富なる貨物を積込み、スエズを越えて仏国に輸送するに及び、蘭・英両国は共力して埃及に策動し、之が防止策を講じた。

会社は欧洲の敵のみならず印度に於ても其敵と戦はねばならなかつた。一七八二年には海賊船によつてマラッカ海峡を不安ならしめたリウー Riouw のブギン人酋長ラージャ・ハッジ Raja Hadji と戦つた。彼はジョホール並レムバオ Rembao 等の君主と結び、一七八四年マラッカ市を囲んだが、和蘭艦隊の本国より来るありて敵を敗北せしめた。ジョホール王等は会社の封侯となつた。またボルネオ、セレベスの騒乱も平げられ、爪哇の数々の暴動も鎮められた。但し会社の衰微、政治の腐敗は甚だしく、なまなかの改革は何の役にも立たず、さりとて徹底せる根本的改革も考へられなかつた。

且つ会社の厳格なる秘密主義は、能く十八世紀末葉に至るまで財政の紊乱を隠蔽し得たけれど、一七八〇年英国と戦端を開くに及んで、会社の内状漸く明白にして、一朝にして信用地を払つた。かくて会社は政府に哀願して急を救ふの外に途なきに至り、一七八一年に二五〇万フロリン、八二年に八〇〇万フロリンを船舶艤装費として政府から借入れたが、それでも当面の急を救ふに足らず、一七八五・八六年には更に一、七〇〇万フロリンを借入れた。而も政府は会社を以て尚未だ絶望なりとせず、委員を任命して其の実を調査せしめ、全然組織を改めて更生を計らんとし、特別委員を東印度に派遣した。

然るに一七九三年に至り和蘭は仏国と戦端を開くことになつた。一七九五年一月太守嗣子は英国に亡命し、二月英国の勧誘により、植民地の官憲に向ひ、仏国の侵略を免れるため、英国の保護の下に立つべきことを求めた。エルフィンストン提督の率ゐる英艦隊は此の要求を齎して喜望峰に赴き、その応ぜざるや武力を以て強要し、九

五年九月十六日之を降した。印度の領地も同様の運命に遭つた。九六年二月までに錫蘭の蘭領トリンコノマレ、オーステンブルグ Oostenburg ヤフナパトナム Jafnapatnam マナアル Manaar バティカロ Baticalo ヌゴムボ Ngombo コロムボが悉く英国に奪はれた。印度大陸の出張所も全部降つた。マラッカ、西スマトラの諸地点等も同然であつた。事情かくの如くにして会社の窮境は極度に達し、その負債は一七九五年に於て一一二百万フロリンに達し、救済の途最早絶えた。会社は此年日本及び支那に対する貿易独占権を保留する外、悉く其他の権利を放棄し、植民地を挙げて政府に引渡し、一七九八年全く其の事業を停止し、一八〇〇年法律上の解散を遂げた。

第四章　蘭領東印度の経営

第一節　仏革命戦中の蘭領東印度

東印度会社解散当時和蘭に残されたるは爪哇・パレンバン・バンジェルマシン・マカッサル・ティモール・テルナテだけで、其他は英国に征服されてゐた。而も英国が叙上の地域を和蘭に委ね置きたるは、印度総督府が、ティツポ・サヒブとの戦争並にナポレオンの埃及遠征のために、攻撃の余力なかりし為である。蘭領に於ける貿易は、中立国の国旗の下にのみ行はれ、蘭船は海上から姿を消した。

当時爪哇は会社領、及びバンタム・スラカルタ・ジョクジャカルタの三国に分れ、最後の二者は Vorstenlanden と呼ばれた。爪哇の主要産物は珈琲・胡椒・砂糖であつた。バタヴィアは不健康地なるに拘らず当時既に一四五

・〇〇〇の人口を算した。バンタムは一七八〇年以来衰微し、人口は十八万にすぎなくなつた。スマトラにはパレムバンに一出張所があつた。これ条約によるサルタンの錫納付を監督するためである。ボルネオでは胡椒貿易のためにバンジエルマシン、セレベスではマカッサルを保持して居た。軍艦がないので爾余の蘭領は英国の思ふ儘であつた。一八〇〇年英艦バタヴィアに現れたが、港内の船舶を掠奪し、二小島上の建物を焼いただけで十一月去つた。

一八〇一年三月、アミエン条約によつて英国の進出は一時中止となつた。和蘭は錫蘭を譲渡しただけで其他の領土は悉く還附された。乍併一八〇三年に至り再び蘭・英の国交断絶した。但し此時和蘭は大小十三隻の軍艦を印度に有し、モルッカ群島との連絡を取ることが出来た。而も船内に疫癘発生して多くの将士死し、船体の故障によつて多く入渠を必要とするに至り、和蘭はまた全く無力となつた。一八〇六年初喜望峰は再び英国に帰した。此年秋英艦はバタヴィアに於ける和蘭の船艦を拿捕し、印度に於ける海上権の殆ど全部を亡ぼした。次で英艦隊はマドラ海峡の一要塞グレシク Gresik に現れ、此地に碇泊中の蘭船を拿捕したので和蘭の海上権全滅し、爪哇以外の領土との交通不能になつた。

この外患に拘らず、爪哇は好況であつた。砂糖並に珈琲栽培は大なる発展を遂げた。革命起り、その珈琲園荒廃に帰したるため爪哇は大なる利益に浴した。当時珈琲の世界生産額は八千万ポンド、ジャマイカ、西班牙領アメリカに次で爪哇の産額は一・五〇〇万ポンドに達した。かくて一八〇八年総督ダエンデルス Willem Herman Daendels が来着した時にはバタヴィア金庫には二百五十万グルデンの現金、並に倉庫に八百万グルデンの貨物があつた。貿易は中立国の船で行はれた。

ダエンデルスは和蘭に於て武将として知られ、ナポレオンが之を印度総督に選抜したのも、故であつた。併乍ら瓜哇では軍事上の問題が彼を待つてゐた。彼は現存の印度会議を解散し思ふが儘に之を再建する権能を与へられてゐた。また其の前任者の如く、此の会議に束縛されることなかつた。かくて彼は着々改革を断行した。武力の充実に努めて瓜哇軍の兵員を一万六千、内四千を白人兵とした。スラバヤに兵器廠、サラマンに砲兵学校、バタヴィヤに陸軍病院を建てた。アンジエル Anjer パナルカン Panaroekan 間の嶮難を拓いて駅逓路を通じ、マドラ海峡にロードウィク Lodewijk 堡を、其他海岸諸地点にも堡塁を築き、バタヴィアの防備を堅めた。

西海岸にも堡塁を築かんとし、バンタム王に必要なる労働者を供給せしめたが、摂政異議を唱へたので、ダエンデルスは兵力を以て王宮を襲ひ、摂政を死刑に処し、バンダム国を会社領とし、王子に年俸一五・〇〇〇フロリンを与へて領土の一部に君臨せしめたが、全く空位を擁するにすぎなかつた。バンタム人は山中に拠りて劫掠を事とし爾来騒擾絶えなかつた。一八〇九年にはチエリボン地方の諸土人君主等をも和蘭軍官吏たらしめた。

スラカルタ・ジョクジャカルタに対しても同様強硬手段を取つた。彼は此等の宮廷に於て和蘭官吏が旧来守つて来た卑屈な儀礼を廃した。また一八一一年、罪を犯せるジョクジャ王の一族の一人を、王が引渡しを拒んだ。軍隊を以て脅威したが、此男が逃亡し辛苦して之を捕へた。ダエンデルスは王をして太子に譲位せしめた上、償金を払はせ、新王からは領土を割譲させた。

ダエンデルスは同様にして和蘭の勢力を外領にも確立せんとしたが、艦船の欠乏と英海上権の優越との為に果

さなかつた。パレムバンに於ける胡椒並に錫の交付額は次第に減じ、和蘭の貿易は衰へた。ボルネオとの交通困難となり、一八〇九年商館を棄て堡塁をサルタンに売つた。マカッサルはモルッカ諸島の香料独占のために必要であつたが、英国が一八一〇年該群島を占領するに及んで無意義となつた。

彼はまた爪哇の政治改革にも努めた。彼は先づ官吏の着服を厳禁した。彼は官吏に贈受・内職等々を禁じた代りに、充分の俸給を与へることとした。また珈琲栽培の奨励、強制交附の増額、行政改革によつて収入を増した。通貨状態も紙幣買上と土地売却の収益とによつて改善された。また密売買を防ぐ為め阿片販売を各区に賃貸し、之によつて阿片専売により利益をも増した。また司法制度も改善された。

叙上の努力並に功績に拘らず、彼は植民者の間に不評判で、数々の苦情が本国に訴へられた。一八一〇年和蘭を合併せるナポレオンは、一八一一年彼を召還してヤンセス中将 Divisionsgeneral Jan Willem Janssens を後任者とした。ダエンデルスは英国の再襲に備へるために大に努力したが、植民者は之を喜ばず、新総督に向つて之を中止せしめた。蓋し彼等は英国が仏海軍の全滅に満足し、バタヴィアを再襲せぬだろうと極め込んだのだ。

第二節　英国治下の爪哇

乍併それは印度総督ミントオ卿の考ではなかつた。彼は夙くより爪哇征服を志し一八一一年其の為に兵一二、〇〇〇、百隻よりなる艦隊を動員した。毎年蘭領印度を研究しつつありしペナンの年若き知事ラッフルス Thomas Stamford Raffles が、爪哇の土人君主等と通じ、一切の準備を引受けた。艦隊はマラッカを出帆して、一八一一年八月にバタヴィアに現はれた。当時爪哇の和蘭兵力は一七・七七四、内欧羅巴人二・四三〇、土民兵は概ね

強制せられたるものに、て最も頼甲斐なく、白人兵は疾病に悩んでいた。主隊約九千人はメースター・コルネリス Meester-Cornelis は極めて無能であつた。

英軍九・〇〇〇は抵抗を受けずに上陸した。司令官オーチミュティ Auchmuty はバタヴィアの和蘭人及び土人に降服を勧めたが、ヤンセンス中将之に応ぜず、政府をプィテンタルク附近チセロア Tjseroa に移した。八月八日英国軍は防禦なきバタヴィアに入り、和蘭の一部隊が拠れるウェルテフレーデン Weltevreden に向つたが、蘭軍はユーメルの命令により三百の砲を委棄して退却した。英軍は進んでメースター・コルネリス堡を囲んだが、約五十の兵は英軍の捕虜となり、ユーメルは城外に出ると共に、武器軍服を棄てて潰走し、ヤンセンス及びユーメルは僅に数百の兵と共にプィテンゾルクに逃げた。彼等はミントオ卿の第二回の勧降を斥け、潰走兵の復帰を待つたが、更に姿を見せないので、政府をサマランに移した。

彼等は此地に堡塁を築かんとしたが、土人は工事に服するを肯んぜず、土人君主より徴発せる軍隊は使用に堪えなかつた。そのうち九月九日に至り、オーチミュティ卿を載せたる英国艦隊サマランに現れ、三度勧降したがヤンセンスは之を斥けてサラマンよりウンガラン Oengaran に退却した。英軍は十二日上陸してサラマンを取り艦隊はシダジュ Sidadjoe に赴き軍隊はウンガランに進んだ。蘭軍は更にサラティガ Salatiga に退却したが、その竟に敵すべからざるを知りて十八日降服した。之によつて全植民地英領となり、軍人は悉く捕虜となつた。

いまや蘭領印度の政治は、九月十一日ミントオ卿によつて副総督に任ぜられたる三十歳の少壮政治家ラッフル

スの手で行なはれることとなつた。瓜哇に於ける新英国臣民は、印度に於ける英国人と同様の権利を享有することと並に喜望峰以東の一切の諸国との貿易の自由が約束された。彼は第一に和蘭人と妥協し、第二に土人六百万を壊柔するに全力を尽した。和蘭人の大部分は仏国の支配を喜ばず、且つ英国支配が彼等の貿易に齎す利益を思ひし故に、第一の目的は遂げられた。彼は和蘭人中よりムンティング Muntingh 及びクランセンス Clanssens の二人を選び、印度の例に倣ひて設けたる参事会議 Council の会員とした。但し第二の目的は遂げるに困難であつた。蓋し土人は此の戦争に乗じて非運を挽回せんとの希望を抱いたからである。即ちスラカルタ・ジョクジャカルタの君主はラッフルスに向つて種々なる要求を提出したので、ラッフルスは自ら交渉の任に当りて之を撤回せしめたけれど、両王とも心中不平で、乗ずべき機会を待つた。かくて一八一二年パレムバン遠征のため英国兵力薄弱となるやジョクジャ王は直ちに兵を挙げた。但し幾くもなく英軍のために破られ、王は廃せられて放逐され新王即位し、領土も権力も一層狭められた。一八一三年バンタムに起りし叛乱も容易に平げられ、バンタムは一州となり、王は唯だ年金のみを受けることとなつた。

ラッフルスは外領に向つても同様の力を注いだ。バタヴィア陥落の報伝はるやパレンバンのスルタンは和蘭出張所を襲ひ、尽く蘭人を殺した。一八一一年ラッフルスの派遣せる委員に対しては絶対的独立を主張して其の要求に応じなかつたので、一八一二年ラッフルスは遠征軍を派した。スルタンは戦はずして奥地に逃げたので、英軍パレムバンを占領し、王を廃して其の弟を即位せしめた。新王はバンカ Banka 及びブリツン Blitoeng 二島を英国に譲渡し、英国の主権を承認した。この遠征の最大の利益はバンカの錫鉱獲得でその採掘額は僅々二年間に七千より二万五千ピコルに上つた。

和蘭が長く委棄してゐたボルネオとも密接な関係を結び始めた。一八一四年ポンティアナック Pontianak に出張所を置いた。バンジェルマシンのサルタンは、和蘭人に与へしと同様の権利を英人に与へ、若干地域を譲渡した。其処に瓜哇から浮浪人を移住させアレキサンダ・ヘヤ Alexander Hare を隊長とした。

マカッサルの和蘭商館も一八一二年英国のものとなつた。但し土人の反抗烈しく、遠征隊を派したけれど多く効なかつた。日本に於ける和蘭の財産を継承せんとしたラッフルスの努力は全く失敗した。一八一三・一四年英国船が瓜哇より来りしに拘らず彼等は商館を渡すことを拒んだ。

次に特筆すべきはラッフルスの土地制度改革である。彼は自ら瓜哇の各地を巡視し、従来の制度を根本的に改革する必要を痛感し、マッケンゲー大佐の外、前和蘭官吏クノップス Knops ラウィッツク・フォン・パブスト Lawick van Papst ローテンブーラー Rothenbuler を委員に任じた。委員は熱心に事に当つた。その調査により瓜哇には私有地なるもの無く、総ての土地は君主に属し、君主は之を一定の納税に対して豪家及び官吏に貸下げ、後者は更に之を農夫に賃貸して居ることが知れた。農夫は農産物の販売にも束縛を受け、且つ種々なる賦役を課せられてゐた。彼等は努力進歩の念を失ひその日暮しになつたのも無理ない事情であつた。ラッフルスは一切の強制交附並に賦役を廃止し、一切の土地を政府の所有に移し、之を分割して一定価格一定期間で農夫に賃貸することとし、一八一三年秋より之を実行した。小作料は土地によつて多少の差あるけれども平均収穫の四割と定めた。之は古来の習慣を一朝にして変へたもので種々なる困難を伴ひ、特に事に当る官吏に不足したが、期待せられし君主等の反抗もなく、全体として極めて有意義にして且つ進歩的なる改革

であつた。

同時に彼は司法制度の改革も行なつた。外国貿易は征服と同時に自由を与へられた。財政組織も簡潔な制度に改められたが、収支は相償はなかつた。一八一二・三年度は支出八百四十万、収入五百万ルピー、一八一四・五年度は七百八十万ルピー、収入は両年度とも六百五十万ルピー前後であつた。年は支出七百廿万、一八一四年一月一日より瓜哇ルピーを採用した。一ルピーは二十四和蘭ストゥイヴァに当る。彼は通貨としては一八一四年一月一日より瓜哇ルピーを採用した。一ルピーは二十四和蘭ストゥイヴァに当る。この支出過多がベンガルの印度会社当局の不満を買つた。また和蘭時代の紙幣を回収するため、公有地を売却し、その公売に際してラッフルス自身も之に加つたことが非難の種となり、一八一六年彼は瓜哇を去つた。ジョン・フェンダル John Fendall 彼に代わつた。ラッフルスは英国に帰りて一八一七年瓜哇史を公にし、蘭領東印度が如何に重大なる意義あるか、如何に大なる利益が其処で英国を待ちつつあるかを力説したけれど、一般世界政策の動向を如何ともし兼ねた。

第三節　印度に関する英国との交渉

一八一四年八月十三日英国政府がロンドンに於て、一八一三年再び独立国となれる和蘭と結べる条約は、一八〇三年一月一日和蘭領たりし総ての植民地を和蘭に還付することを定めた。之は和蘭を以て大陸に於ける仏国に対する同盟国とし、同時に独逸を牽制するための政策に出たものである。和蘭は植民地受取委員を任命したが、其の間ナポレオンのエルバより復帰するありて出発遅れ、一五年十月漸く印度に向つたが、フェンダルは政府並に東印度会社の命令なしとて引渡しを拒んだ。前者は一六年六月十八日、後者は七月一日到達したので、八月十

九日漸く、瓜哇は和蘭委員の手に還つた。パレンバン、バンジェルマシン、モルッカ諸島の英国人も抗議や要求を提出したが結局和蘭の手に戻つた。印度の諸商館並にマラッカも還付を受けた。スマトラ西岸パダンには一八一八年初ラッフルスがベンクレーンの副総督として来任し、一七九五年以降の行政費の賠償を受けずば引渡をせずと主張したが、一九年ベンガルよりの命令で漸く撤退した。但し英国との交渉は尚ほ止まなかつた。

恐らく印度会社も英国政府も大体之で満足して居たのであらうが、ラッフルスだけは之では祖国の貿易並に植民的利害と相容れぬものと考へた。彼は此為には印度諸島に於て領土を得る必要あるのみならず、東亜に通ずる海峡を確保するの必要を認め、遂に総督ヘスチングスを同意させた。彼は一八一八年暮ジョホール王の領土なる新嘉坡島に着目した。此地は曽て馬来国の首府たりしが、其後は一漁村として委棄されて居たのである。恰も好し此時ジョホール国では王位争奪の紛争あつたので、ラッフルスはその一人を王と承認し、之と一八一九年二月条約を結び、東印会社はジョホール国内に出張所を設くるの権利を得た。而して之に対して年額五千弗及外国船の支払ふ手数料の半分を交付することとした。新嘉坡には直ちに出張所を築きファーカー Farquar 少佐を理事官とした。

和蘭は英国の新嘉坡占領を甚だしく憤慨し、強硬なる抗議を提出した。英国政府は和蘭の要求に応ぜんとしたが、それに先ちてヘスチングスの意見を徴することにした。彼も当初は和蘭の要求の正当なるを認めて居たが後に其の意見を変えたので、ラッフルスの行動を是認する回答を与へた。蓋し新嘉坡の重要性は一日一日明白となり、人口は迅速に増加し、一八二〇年夏には已に一万乃至一万二千人の移住を見た。英国政府も漸く和蘭の要求を斥けることに決した。かくて英・蘭交渉は幾多の曲折を経て、一八二四年三月十七日、漸く条約の成立を見た。

条約の要綱は次の如くである。

㈠ 条約の第一部（第一―八条）は、貿易並に航海に関するもの。両国は印度に於て最恵国の取扱を受け、関税は内地人に対するもの二倍を超えざることとし、ただモルッカ群島だけは和蘭が香料専売を続ける間、英国に閉鎖された。更に両国とも奴隷廃止を約束した。

㈡ 第二部（第九―十二条）は領土関係の規定。和蘭は印度大陸に於ける全領土を英国に与へ、スマトラに於ける英国の全所有を譲られ且つ英国はスマトラに土地占有の意図なきを言明した。和蘭は新嘉坡・マラッカを譲渡し、ブリトン Blitong 島を譲渡され、且つ英国は新嘉坡海峡以南の諸島を領有せずと約束した（カリモン・バッタム・ビンタン・リンギン其他）。

㈢ 第十三条は問題となれる領土の交換は一八二五年三月一日に行はるべしと定めた。

㈣ 第十五条は両国は交換せる植民地の執れをも他国に譲渡するを得ずとし、若し両国のいずれかが之を棄つれば直ちに旧所有者に帰するものとした。

㈤ 第十六条は和蘭より英国に支払ふべき金額を十万磅と定めた。

第四節　印度に於ける和蘭の難局

問題となれる領土の決定について英国との交渉が茫苒し居るうち、問題とならぬ植民地の受取に際しても和蘭は困難に遭遇した。英国統治は瓜哇に於ける幾多の弊政を改革したが、同時に広汎なる土地を売却して財源を減じ、且つその急激なる改革によつて土人を不安ならしめ、バンタム及びチェリボンでは屢々騒動が起つた。和蘭

委員並に政府はラッフルスが断行せる改革の内容並にその結果について充分なる知識がなかつたので甚だ当惑したが、一八一八年に至りて漸く爪哇統治の方針を規定し得た。爪哇は二十の政治区 Regentschaften に分たれた。財政状態は依然として不良、一八二〇年以後年々歳入不足に悩み、一五二五年政府は新に創立せられたる一商事会社と契約し、十二年間プレアンガー政治区の珈琲を交附する条件で八百万グルデンを前渡しさせた。それでも間に合はなかつた。多過ぎる官吏の俸給、軍事費、土地買戻、騒乱鎮定費に莫大の支出を必要とし、種々調査の結果、紙幣回収手形支払等に少くも一千四百七十万フロリンを要するを見、一八二五年幕カルカッタのパーマー商会 Palmer and Co. より一千五百万シッカルピー Sikkarupie を銀貨にて借入れんとしたが破談になつた。

土人君主間並に摂政間の反目、王位の頻繁なる更送等が爪哇の政情を不安ならしめた。土人君主が土地を金に換えるのが、此等の陰謀を助長した。蓋し彼等は其の土地を支那人及び欧羅巴人に長期に亘りし貸与し、賃料の前払を受けていた。総督ファン・デル・カペレン Van der Capellen は再度奥地を巡視し、その弊害を見、一八二三年期限三年以上の土地貸借を総て無効と宣告した。君主等は其の為に既に費消せる料金の払戻しに苦しみ、借地人は投じたる資本を失ひ種々なる苦情続出し、委員を設けて善後策を講ぜねばならなかつた。総督は其他も無鉄砲な断行をした。二〇年には一切支那人のプレアンガー政治区に居住するを禁じ、一二年には欧羅巴人といへども理事官の許可書なければ滞在を許さぬこととした。彼等の土着を妨ぐるため、ラッフルスが売却した土地を買戻した。二三年には旅行さへも困難にした。土人の摂政は全部廃めたかつたろうが、反抗の虞あるので、二〇年五月十九日の規定で其の職責を行政の一部分に限つた。

爪哇以外の領土も決して安静でなかつた。西スマトラでは一八二一年以来狂信回教徒パドリ Padri と戦はねば

ならなかつた。戦争は通路なき未開の奥地へと進められていつたので甚だ難儀であつた。一八二五年ベンクレーン其他の英国領を受取る時も騒乱があつた。パレムバンも其例に洩れず一八一九年騒乱起り、瓜哇より派遣せられし遠征隊は失敗し、二一年更めて軍艦十八隻より成る大軍を派して漸く之を鎮めた。和蘭は先に廃せられたパレンバンのサルタンを復位せしめたが、サルタンは二四年米和蘭人を襲ふたので之を廃した。西ボルネオに於ては土人との間だけでなく、多年此島にありて砂金採取に従事し、殆ど独立の姿なりし支那人多数との間に紛糾が起つた。彼等は人頭税を納めず、和蘭の命令に服せず、屢々和蘭人出張所を襲ふたので、一八二二年遠征軍を派したが、十分鎮定し得なかつた。幸に南ボルネオではサルタンが容易に和蘭の命を奉じた。セレベスでも土人の叛乱、海賊の侵寇が屢々遠征軍派遣を必要とした。一八二五年にはボーニ国 Sultanat Boni に大軍を派した。モルッカ群島では叛乱は起らなかつたけれど、島民は疲弊の極に達し、人口は減退しつつあつた。二〇年に任命せられし調査委員は、その主因を独占制度に帰し、二二年モルッカ知事も、二四年巡視せる総督も同意であつたが、多年の制度を俄に改め難しとして、丁香樹の伐採、香料の強制交付を廃し、賦役を減ずることとした。ティモール島では叛乱は起らなかつた。

当時政府収入の太宗は珈琲販売であつた。次には関税で、和蘭は一八二三年以来蘭船で輸入される繊維製品には一五%、外船によるものには二三%の従価税を課した。二四年には之を夫々二五%・三五%に引上げた。当時和蘭より輸出は少額であつた。戦時中英国はその廉価なる製品と発達せる海運とを以て完全に印度市場を征服した。和蘭は英国と角逐して植民地市場を回復する最上の方法として一大商事会社の創立を決議し、国王自ら四百万フロリンの株主となり、四分五厘の配当を保障したので応募者甚だ多く、三千七百万フロリンの資本を以て

一八二四年八月会社の設立を見た。但し爪哇では此会社が東印度会社の轍を踏んで一切を独占せんことを怖れ之を喜ばなかつた。一八二五年一蘭船到着し、旅客貨物及び将来貨物に対し珈琲一二・〇〇〇ピコルを和蘭に送らんことを求めた時、総督は之を拒んだ。本国では之を機会にファン・デル・カペレンを召還し、彼の代りに軍司令官、副総督メルクス・デ・コック Merkus de Kock を総督とした。

第五節　爪哇全部の征服

総督更迭は中部爪哇大騒乱の間に行はれた。その原因は土地長期貸借の禁止であつた。大多数の君主は前払として受取つて賃貸料を返却し得ぬ状態であつた。和蘭官吏が該賃貸料並に賃借者が施設したる農場及び建物に対する代償を強要した時、不平は頓に昂まつたが、中にもジョクジャカルタでは宮廷の大官マンク・ブミ Mangkoe Boemi 及びディポオ・ネゴロオ Dipo Negoro が、反欧党を糾合した。而して理事官等が之に対する措置を誤つたので、ディポオはセラロン Selarong に亡げて兵を挙げ、幾くもなくして爪哇の西部は上下をこぞり和蘭人を敵として起つに至つた。当時和蘭の兵力は一万四千を算したが半は土人であり、而も其の大部分はセレベス遠征中であつた。デ・コック将軍は迅速に内地に進軍したが兵力の不足に鑑みスラカルタ王の軍隊を提供せしめた。叛乱は極めて広汎なる、而して交通不便なる地域に亘つたが、同時に彼等は若きサルタン、摂政等が軍隊と共に駐まり居たるジョクジャカルタを囲み、且つカドウ Kadoe 並サマランを脅威した。ディポオは徹底して和蘭人を掃蕩せんとし、如何なる交渉にも応じなかつた。デ・コックは先づ叛乱の東方に播まるを防ぎ、セレベスより軍隊帰還の後にジョクジャカルタに救援隊を送つた。山中戦が続いて和蘭人は多くの生命と金とを犠牲にした。

二六年には叛軍は多数のジョクジャ勢力家を其の伴へる蘭軍と共に厭殺した。而してスラカルタを和蘭は一八一三年に廃せられしジョクジャのスルタンを復位せしめ、その勢力によつて民心を鎮撫せんとしたが全く無効であつた。二六年暮には軍中にコレラ流行して一層困却した。二七年春に至り、本国より三千二百の義勇軍の来着、並に蘭領諸地より援軍の到着ありて、此年暮ディポオの勢力漸く不利となつたが、而も彼は毫も悲観せず、和蘭よりの交渉に対しては、己れを以て瓜哇回教徒の首領と承認すること、瓜哇人と欧羅巴人との争議の決定はコランの定むる所に従ふことを条件とした。之は承認すべくもないので、戦争は継続した。ジョクジャの新サルタンは殆ど頼みにならなかつた。二八年死んだ時は却つて和蘭人は厄介払の思ひした。其間デ・コックと政府委員との間に作戦計画について意見の衝突あり、兵士給料の金額に関する争議あり、欧羅巴軍隊の風土に悩むありて多事多難なりしが、ディオは四方より欧羅巴兵に改められて勢漸く蹙まり、味方も少なくなり、諸将は降り彼の子は捕へられ、彼自身も逃亡せねばならなくなつた。彼の頭には五万フロリンの賞を賭けたが誰も之を敢てしなかつた。三〇年二月彼はデ・コックと会見しサルタンの称号並に宗教的首長の地位を要求して和をぜんとしたが、コックは之を肯んぜず、彼の軍隊を武装解除し、彼を捕へてバタヴィアに送つた。彼はマカッサルに流され一八五五年其処で死んだ。この戦争で和蘭義勇兵の三分の二は死した。利和蘭の直轄は更に広くなつた。

此の戦争の経験により、有効に治安を維持する為には土人君主領を少くする必要を痛感し、スラカルタ及びジョクジャカルタ両君主にはスカワティ Soekawati パジャン Padjang マタラム Mataram グヌン Goenoeng キドウル Kidoel だけを残して其他を取上げ、之より生ずる収入減少の賠償としてスラカルタには年額二六四・〇〇〇フロリン、ジョクジャカルタには一八二・〇〇〇フロリンを支払ふことにした。ジョクジャの無力なる君主は

直ちに屈従したが、叛乱中和蘭に忠誠を守りしスラカルタのサルタンは、和蘭の処置に不平で抵抗の勢を示したので之を廃位してアムボイナに流した。その後継者は直ちに屈従した。

和蘭は植民地から利益を挙げる必要があるので、デュ・ビュ Leonard du Bus de Chisignie を調査委員として瓜哇に派した。彼は二六年初バタビアに着任し、行政整理、新貨幣制度、農場奨励等によつて財政状態の改善を図つた。

一八二五年初めてニュー・ギニアを征した。それはティドル王が該島西部に対する権利ありといへるに基きたるものである。一八二八年最初にトリトンス湾に植民地を置いたが甚だしく不健康地なりしため撤退した。

第六節　栽培制度

国王を初め和蘭政治家は植民地をして和蘭貿易の伸展並に和蘭財政の改善に役立たしめんと欲していたが、デュ・ビュの方法は急速に此の目的を遂げ難く思はれた。当時和蘭は殆ど破産に瀕し、国債利子だけでも一八三〇年には二四・八二五・〇〇〇フロリンに達した。国王が迅速なる巨利を約束した商事会社の株主は不平であつた。何等か非常手段を講ずる必要があつた。その実行の適任者として一七八〇年に生れ五十年間植民地に住めるファン・デン・ボッシュ Van den Bosch が総督に撰ばれた。而して非常手段とは結局強制労働の外にない。ボッシュはその実行を期して一八三〇年赴任した。

ボッシュの方針は次の如くである。栽植を拡張し、出来るだけ廉価で出来るだけ多量の農産物を政府の手に収めること、そのためには強制労働の外に良策なき故、出来るだけ巧妙に之を実施すること。かくてボッシュは土

人に対し、地代を納める代りに土地の五分の一を政府に譲渡し、古来よりの義務なりし六十日の賦役を果たす代りに、その土地に必要なる労働者を提供せしめることとした。彼は譲渡せられたる土地を政府の為に耕作せしめんとしたのである。また金銭、労働者の提供等によつて耕地の拡張、工場の設立等を補助し、特にインデイゴ・甘蔗、後には茶・煙草・並に養蚕を奨励した。これは要するに会社時代の旧制に復帰したものであつて『栽培制度』と呼ばれる。これは表面は土人との自由協定によることになつて居るけれど、実際は強制であつた。理事官等は人口一人につき二フロリンの農産物を挙げるように訓示された。政府は珈琲一ピコルに対し、金十フロリン又は銀十二フロリンを土人に払つた。この方法は種々なる非難を受け、且つ土人の反抗を招いたに拘らず、ボッシュは之を強行した。一八三四年には五分の一の土地譲渡を義務的とし、強制交附を一切の作物に遂行した。白耳義離脱後一層財政難に陥れる和蘭は、ボッシュをして自由に振舞はしめた。一八三三年には彼の威厳を増す為にゼネラル・コムミッサルに任じ、後に彼の後任者となるボウ J. C. Baud を副総督としたコムミッサルに任ぜられたる後ボッシュは、同様の制度をマストラにも布かんとした。彼は一八三二年パドリの騒乱鎮定を機とし、兵を西スマトラに出だしてパダン高原に進出しボンジョル Bondjol を征服した。而も強制運送勤務、租税・闘鶏禁止、和蘭兵の狼藉等が、土人の激昂を買ひ、三三年諸処に叛乱起り、和蘭守備兵を殺しパドリと合流して白人を島外に逐はんとした。総督は自らスマトラに赴き、バンジョルを攻撃したけれど失敗し、土人を懐柔するために重税と賦役とを廃することとした。

彼はそれでも計画を棄てず、東スマトラ征服を企てたが、国王は彼を植民大臣に任命したので帰国し、ボウ彼に代り、方法に於て若干の変化を加へたが彼の方針に従つて栽培制度を遂行した。この制度は幾多の非難あるに

拘らず、啻に蘭領印度をして収支相償はしめたるのみならず、母国の金庫に莫大なる貢献をなし得た。即ち三一年には現金七〇〇・〇〇〇フロリン、農産物二百万グルデンを母国に送り、三二年には夫々七〇〇・〇〇〇フロリン、四百万グルデンを、三三年には農産品九百万グルデンを母国に送つた。うち七百五十万フロリンは印度借款の利子並に償却に、四八二・八〇〇フロリンは他の植民地に使用せられ、三百二十万フロリンは和蘭国庫収入となつた。三四年二百万フロリン、三五年二百五十万フロリン、三六年三百万フロリン、三七年五百六十万フロリン、三八年六百八十万フロリン、三九年同上、四〇年千五百七十四万フロリンが印度より本国に送られたことになつているが、実際は遥に多額に上つている。三五・三六・三七年だけで六千四百万フロリン、うち五千万フロリンは国庫収入となつている。

但しこれは大局から見たことで、一年々々の成績を見れば、如何に苛斂誅求を敢てすればとて、本国が必要とするだけを全部を印度から搾取することは不可能であつた。総督府は本国の要求全部にも応じ得ず、また残額で印度の政費を間に合わせることも出来なかつた。それでボウの後継者デ・エレンス De Erens は瓜哇銀行から借款しなければならなかつた。また印度より来るべき送貨に対して正規に政府に前渡して居た商事会社も財政困難になつたので三九年ボッシュは五千六百万フロリンの新借款を議会に提案した。ボッシュの栽培制度は瓜哇人に苛酷なる負担を課するもので甚だしく土人の不平を招いてゐたし、また国内にも之に反対する者少くなかつたが、この借款提案は彼をして失脚せしめた。

当時蘭領東印度の状勢を見るに、戦闘は尚熄むべくもなく且つ英国との軋轢も果てしなかつた。スマトラではパドリの騒乱が続いた。三三年暮にはアメロンゲン Amerongen 堡が土人に征服された。三四・五・六年に亘りて

小戦止まず、ボンジョル奪回は遂げられなかつた。三七年パドリの首魁降服して後も反抗やまず、バタック地方 Battakland が全く征服されるまでには更に一年を要した。それが達せられてから東岸コタ・ピナン Kota-Pinang に堅塁を築きて根拠地とした。総督府は先づ尚ほ有力なりし此地の英国貿易を駆逐せんとした。西ボルネオでは土人と海賊の不安が止まなかつた。多数の支那人が殆ど独立してゐた。貿易は爪哇とよりは新嘉坡と行はれた。モルッカ諸島も海賊の横行で不安であつた。

第七節　ボウ植民相

一八四〇年ボウ植民相となり、印度総督を督励して栽培制度を強行せしめ、国債利子の外、年々三千万—五千万グルデンを母国々庫に貢がせた。当時爪哇の支出は約六千万グルデン、収入のうち四千八百万グルデンは租税爾余は政府農産物の販売によつた。一八四〇年—七四年に至る三十五個年を平均して農産物販売による利益は一年二二・三三・〇〇三グルデン、内珈琲売上高一八・二七一・七九七グルデン、其他四・〇六一・二〇六グルデン。従つて珈琲より得る利益が断然抜群であつた。

ボウ大臣並に総督は啻に和蘭の為に益々多くの農産物を提供するのみならず、本国との通商並に交通を旺盛ならしめねばならぬとした。個人の生産が多量でなければ、外国商人又は船舶が仕事を得難いので、私人企業は出来るだけ圧迫した。この貿易独占は一切の企業精神を抑圧し、且つ一般印度在住蘭人を窮せしめた。而して土人は強制栽培の外は要塞建築労役其他の賦役に苦しんだ。政府のために労役して自己の田野を耕す暇ないため、四十年代の末葉には飢饉のために多数の餓死者を出した。

但し瓜哇では大した騒動も起らず、外領も以前に比して困難が少なかつた。スマトラに於けるパドリの勢力は衰へ、若干の反抗を抑へてパダンにも強制栽培を行はしめ、一八四七年には西スマトラにも之を施行した。パレムバン及びバンカには常に騒動があつたけれど其の都度鎮定した。

ボルネオだけは事件が起つた。一八三九年英国旅行家ブルック James Brooke が、英国の為に領土を獲るつもりで此島に現れた。時にサラワク Sarawak の君主は叛徒並に海賊と戦争中であつたが、彼は之を助けて敵を平げ貿易独占権を与へられた。且つサラワクはブルネイのサルタンに属していたが、彼はサラワク君主にすすめてブルネイより独立し、ラージャと称せしめた。ブルネイ王は之を承認した。次で一八四六年彼はラブアン Labuan 島の割譲を受けた。これは和蘭側から何の抗議も無かつたのみならず、海賊征討に際しては西ボルネオ理事官はブルックを援助までした。ラブアン島が英人の手に帰するに及び和蘭は初めて仰天し、英国に抗議したけれど英国は応じなかつた。

次にパリ島人が海賊を敢てし、和蘭の命令に従はないので三度遠征して漸く平定した。

また瓜哇の官吏は本国に住まず、住んでも短期のもの多く母国と関係薄いので、ボウ植民相はデルフトの工業学校を卒業せる者に非ずば高級官吏たるを得ずとした。

第八節　一八四八年憲法と其の影響

一八四八年自由党によつて和蘭の憲法改革行はれ、ボウは他の閣僚と共に辞職した。新憲法は第五九条に於て、「国王は植民地を統治するもその細則は法律によつて定めるべし」とした。第六〇条は「毎年植民地の予算並に

現状報告を国会に提出すべし」と定め、且つ「植民地支出の費途は法律によつて定めらるべし」とした。ボウ等が行へる無制約の統治制度は原則としては之によつて覆されたのであるが、内閣の更迭頻繁にして実施に関する細則の制定遅れ、一八五一年に至り漸く貨幣法発布せられ、和蘭の貨幣制定を東印度にも及ぼすこととなり、統治細則も亦同年に発布を見た。

この統治細則も栽培制度、賦役等を直ちに改革することをしなかつた。若干重要な事柄としては、奴隷制度を廃したこと、教育施設に力を注ぐことになつたこと、言論が大に自由になつたこと等である。但し新憲法の効果は年と共に現れ来り、従前の弊政が次第に改められて行つた。栽培制度の残酷に関してはデッカー Eduard Douwes Dekker がムルタトゥリ Multatuli の文名を以て書いた小説『マックス・ハヴェラール Max Havelaar』が痛く和蘭の人心を動かし、その廃止を促進した。之は官吏として十七年在印度の経験によつて書けるものである。強制栽培は次第に廃せられ最後に珈琲のみとなり、一八九二年その廃止案が議会に提出されるまでになつた。また賦役も軽くなり、一八九三年場所によつて三六日・二四日・二一日・一二日と定められた。

第九節　外領

外領では爪哇に於ける如く順調に発展しなかつた。十九世紀中葉の蘭領スマトラは西岸知事区・ベンクーレン副理事官区・ラムポン Lampong 地方・パレムバン理事区から成立つてゐた。西岸区及ベンクーレン区に於ける珈琲強制栽培は極めて順調に発達した。

バッタク地方 Battakländer は一八四三年以来放棄されていたが、一八五五年ブルモン Boeroemon 人がソサ

ク Sosak 人の攻撃に対して援を和蘭に求めたるを好機とし、但しラグンディ Lagoendi 湾の南岸オラヒリ Orahili 並にボトホリ Botohori に対する遠征は失敗に終つた。アトイともまた問題を生じた。一八二四年の条約で和蘭はアトイの独立を尊重すると同時に、奴隷貿易を阻止する義務を負ふた。然るにアトイの諸港を根城として奴隷売買並に海賊が行はれるので、五四年総督は軍艦をアトイに送り、ついで五七年西岸区知事自らアトイに赴き、サルタンと条約を結び海賊を阻止することを約せしめた。

ラムポン地方ではパレムバンタムよりの逃亡者が和蘭に反抗して起つたので、五六年遠征軍を派して之を平げた。パレムバンにも騒乱絶えず、五一年以来数年に亘りて兵を用ゐねばならなかつた。ベンクーレンでも五七年及び五九年に兵を用ゐた。

パレムバンに隣するジャムビに於ては事件が甚だ紛糾した。米国人ギブソンなる者、五一年サルタンを使嗾して和蘭に抗せしめたので、官憲は彼を捕へてバタヴィアに拘禁した。彼は逃亡して米国に帰り、政府をして和蘭に交渉せしむる所あつたので、五七年武力を用ゐた。サルタンは廃せられ、その叔父が和蘭の封侯として登位した。而も前サルタンは国内に大なる勢力を揮ひ和蘭に服せず、七八年地理学協会の調査隊をして調査を不可能ならしめた。八五年にはジャムビ市の攻撃をさえ敢てした。八五年には彼を懐柔するため、その第三子をサルタンとし、彼には年額一六・〇〇〇フロリンを提供せんとしたが、尚は反抗を止めず、九九年には国有炭坑を破壊せんとしたので、遂にサルタンを廃位し、ジャムビをパレムバン区に併合したが、土民の抵抗は更に続いた。

古来よりマラッカ半島のマレー国に属していたインドラギリ Indragiri 及シィアック Siak でも騒動があつた。前者のサルタンは五八年栽植並に鉱山採掘を総督の同意なくして外人に許さぬ約束を結ばさせられた。シィアックではその弟と不和なるサルタンが新嘉坡に赴いて英人の援を乞ふた。宮憲は之に応じなかつた。ウィルソン Wilson といふ英人が援助を約してシィアックに赴き、ブルックの故智に倣ひ武力を用ゐてシィアックの主人公たらんとした。於是和蘭は軍艦を派してウィルソンを逐ひ、サルタンとその弟を和解せしめ、和蘭の主権を承認させた。次にリアウ Riouw のサルタンは、祖先がマラッカを支配せる昔を忘れず常に馬来半島の事件に干渉してゐたが、五六年新嘉坡に赴いた時、和蘭は将来政府の特別の許可なくばリアウを去るべからずと要求した。サルタン之に応じなかつたので、之を廃して叔父を立てた。

六十年代に入りては常にパレムバン並にベンクレーンを騒がせるパセマー Pasemah 人と戦ひ、六八年漸く之を征服した。シイアックに於ても六四年不服なるサルタン廃せられ、之に属せるデリ Deli では諸酋長が和蘭に敵意を示したので、之を保護するため有力なる軍隊を七二年に派した。スマトラ東岸殊にシイアックに対する和蘭の処置は英国との紛争を生じた。新嘉坡の英商はスマトラ東岸との貿易関係の妨害せらるるを欲せず和蘭の行動は一八二四年の条約に反するものとして本国に訴へたので、英・蘭両国の談判となり、七一年の条約により、英国はスマトラの事件に干渉せぬこと、和蘭はシィアック其他の諸国に於て英人に自国人と同様なる貿易上の地位を与へた。

かくて和蘭が独立を認めるのはアトイだけとなつた。和蘭では奴隷貿易・海賊等を根本的に排除せんとし、七

二年二軍艦を派した。アトイでは使節を欧羅巴に派し、仏国其他の国に援助を求めた。和蘭は大に怒り七三年印度会議副議長ニウエンホイゼン Nieuwenhuizen は軍艦四隻を率ゐてアトイに赴き三月二六日宣戦して之を砲撃した。四月五日には三・六〇〇の兵来着し陸上よりも之を攻めた。アトイ人は勇敢に防禦したので四月末蘭軍は一旦引上げた。此年十一月末和蘭は前印度軍司令官スウィーテン J. van Swieten を指揮官として六千の兵を以て再びアトイを攻めしめ、七四年一月には遂に其の城を陥れた。スウィーテン将は城塞陥落を以て戦争は終結せるものと考へたが、実は然らず諸酋長の反抗は止むべくも見えなかつた。スウィーテンに代れるベル Pel 将軍は、反抗の中心地グロート・アイト Groot-Atjih を全く海より遮断し、その貿易を全滅せしめて降服を余議なくせんとし、四十七個所の駐兵屯所を設け、陸上兵力欧羅巴人三千・土人五千、阿弗利加人一八〇、海上では軍艦十三隻、小船六隻を以て沿岸を封鎖した。土人は続々降服し初めた。

但し此の戦法は莫大なる軍費を要するので、政府は総督ランスベルグ Van Lansberg をしてアトイに赴いて対策を講究せしめた。七七年彼は是以上の軍事行動を止め、土人酋長を懐柔するを可なりとし、その方針で交渉を開始して効果を収めた。沿岸諸国は次第に和蘭に服し、グロート・アトイも反抗を試みなかつた。そのため兵力も縮小した。然るに七八年春に至り再び叛乱起り、酋長等の屈服は一時の権変に出でしことが判つた。於是また兵を増し、ファン・デル・ハイデン Van der Heijden 将軍を急派した。十四個月に亘る戦争の後将軍は目的を遂げた。将軍はアトイの諸港を輸入貿易に閉ぢ、土人をして武器を入手する途なからしめ、然る後次第に和蘭と密切なる関係を結ばしめんとした。然るに八一年将軍召還せられ、後任者が稍々温和なる政策を取り初むるや、再び形成不安となつた。新に軍事行動を取るためには軍隊も経費もなかつたので、八三年三月総督となれるトビ

アス Lagingat Tobias は極めて事態を重視した。一八四年夏に至り、全アトイの征服を一と先づ断念し、和蘭勢力を一定区域に集注し、土人が進んで降り来るを待つことに決し、デムメニ Demmeni 大佐が此の趣旨を実行すべく赴任した。これは本国議会の賛成する所であつた。本国では軍費の巨額なるに愛想をつかし、アトイから撤退したいとさへ希望してゐた。アトイ戦争のためには実に一八九〇年まで三億グルデン以上を費している。政府は當にデムメニの処置を承認したるのみならず、八五年には軍艦の大部を召還し、封鎖を解いた。貿易を自由にし、内地の問題に干渉せぬことによつて、土人と協和し、之を懐柔せんと図つた。

乍併土人は依然敵意を捨てなかつた。彼等は宗教的狂熱から、異教徒放逐のためにまた武装し初めた。貿易による利益、和蘭が諸酋長に払へる金は、皆武器の購入に費やされたが、和蘭側は知らなかつた。九二年に至り、叛乱四方に起つた。フェッター Vetter 将軍は鎮定効を奏せずして九七年召還せられ、Toekoe 殺されて一時平和となつたが、七・五〇〇の兵をアトイに駐屯せしめねばならなくなつた。而も一九〇一年叛乱また起り、いつ止むべくも見えない。一切の努力に拘らず和蘭は二十五方哩の此地を征服出来ないのである。

総督府がパリ島民突如ロムボク Lombok 島の和蘭兵営を襲ひ将卒の死傷約四百に及んだ。フェッター将軍が幾多の戦闘の後に之を鎮定した。

西ボルネオでは依然支那人が命に服しなかつた。五三年委員プリンス Prins が彼等の居住地域に屯所を設けんとするや、支那人は起つて之に反抗したので、二千の兵を派し、同時に海岸を封鎖した。かくして主要地点を占領し次第に反抗を鎮める外に途がなかつた。かくして此の地方も和蘭の治下に立ち、阿片及塩の専売も実行され

密貿易防遏の手段も講ぜられたが、一八五五年までは支那人の秘密結社の策動ありて不安尚ほ去らなかつた。また保護条約を結んだ土人等も騒乱を起して、時々遠征を必要とした。五十年代の終、欧羅巴人農夫を移住せしめんとせる計画も彼等の反抗によつて失敗した。バンジエルマシンでは長い間王位争奪の紛争あつたが、五九年争乱勃発し、和蘭官吏は殺され、和蘭が擁立せるサルタンは廃せられた。和蘭はサルタンを置かぬこととし、軍隊を派して反蘭軍を征した。彼等は回教教師の鼓舞の下に長く頑強に抵抗し、六六年に至りて漸く平定した。七〇年に起りし暴動は容易に鎮圧した。

ボルネオの騒乱はセレベスにも波及した。最も有力なるボーニ Boni のサルタンであるサルタニンが、五六年以来和蘭に反抗して其の利益を侵害するので、五八年知事は武方を用いねばならなくなつた。五九年二月及十一月両回の遠征軍によつてサルタニンを屈服せしめ、六〇年アルー・パラッカ Aroe Palakka をサルタンとして和蘭の封侯とした。セレベスの北部、殊に山間地方には和蘭の勢力未だ強からず、沿岸劫掠・奴隷売買等が行はれて、屢々武方を用ゐたが、恒久的の結果は得られなかつた。

モルッカ諸島では六三年に香料専売が廃止されたが、従来の苛斂誅求と香料の値下りとによつて見るかげもなく疲弊した。

チモールの境界は五九年葡国との間に協定なり、二十万フロリンを支払ひて係争地点を手に入れた。

ニュー・ギニアは長く放任していたが、英・独が此島に活動し初めてから多少力を注ぎかけた。一九〇〇年以来沿岸諸地に防備せる出張所を設けた。メランケ Maranke に真珠採取の根拠地を設けた。この仕事に瓜哇から送れる囚人を使つた。今世紀初頭和蘭政府はこの遠隔なる地方に経費を出すことを厭ふて居た。

（**財政**）一八三一―七一年間に蘭領東印度の歳入超過は七億二千五百万フロリンに達し、母国はそのうちから一五九・三四三・五〇〇フロリンを償却した。七一年現在前年度よりの繰越約千七百万グルデンを加へて、七一―九三年間の超過額は八一・八二七・〇〇〇フロリンとなり、そのうち八二七・〇〇〇フロリンは母国の為に使はれた。然る年公債によつて補充した。これはアトイ戦争の結果である。七四五フロリンに達する故、不足三一・五一七・七四五フロリンは九三

区劃。面積。人口。行政官庁。司法。強制栽培収入。珈琲栽培現状。製糖業。錫。茶。農業と牧畜。鉱業と商業。鉄道。外国の侵略に対する恐怖。（『蘭印政庁発行の年鑑』を参照）

第十節　蘭領東印度の現状

第五章　蘭領西印度の経営

第一節　スリナム、英国に占領さる

スリナムは一七八〇年の蘭・英開戦を翌年になつて漸く知るに至つたが、軍隊も軍費もなかつた。英人はデメラリ Demerary ベルビス Berbice・エッセキボを掠奪し和蘭船を捕獲した。移民はスリナム沿岸だけを護らんと若干船舶を武装したが、食糧と奴隷とを積んで此地に向へる蘭船は皆な拿捕された。平和克復によつて失へる

領土を回復した。

外患去りてまた以前の内憂が擡頭し、植民者は負債と黒奴襲来に悩んで居るうち、仏蘭西革命戦争の勃発となつた。和蘭でも革命党勝利を得、オレンジ公は一七九五年初英国に蒙塵し、植民地に向つて仏国の攻撃に対抗するため、英国の軍艦並に軍隊を歓迎すべしと命じた。スリナムは希望峰と同じく之を欲せず、新政府の命令を待ち居るうち、九六年五月五隻の蘭艦、若干の兵を載せてスリナムに来り、一七九五年十月五日付を以てスリナムを告げ、移民は異議なく之に服した。然るに一七九六年英国と戦端を開くに至りスリナムは極度に不安となり、殊に一七九九年三月和蘭艦隊が本国の命令によつてスリナムを去れる後、八月中旬に英艦来襲して降服を要求したので之に応ぜざるを得なかつた。

第二節　スリナムの難局

スリナムはアミアン平和により一旦和蘭に復つたが、一八〇四年再び英国の為に占領せられ、一八一四年の平和によつて再び和蘭に帰した。但しエッセキボとデメラリは還付せられず、英領ギアナとなつた。スリナムは和蘭に復したとはいえ、財政の窮乏年と共に甚だしかつたので、政府は一八二八年ファン・デン・ボッシュ Van den Bosch を調査委員長としてスリナムに派遣し、政治の改革案を立てさせた。之によつて西印度諸島とスリナムとを合併して総督府を置きカンツラール P. R. Cantz'laar を総督に任じて改革を行はしめたけれど、遂に目的を遂げ得ず、段々財政は困るばかりであつた。

植民者の間には不平が漲つた。彼等は一切の植民地が当初から自給自足せねばならぬとするを不公平なりとし、特に西印度諸島をスリナムと合併せるを不快とした。そのために余りに高き租税負担、国境防禦の不備、奴隷使役の制限等について不平を鳴らしたので、本国政府も対策を講ぜねばならなかつた。

（奴隷虐待の継続・白人移民の失敗。クラサオの分離。奴隷改善に対する植民者の反抗・奴隷廃止・黄金海岸蘭領売却・経済状態。）

第四節　蘭領西印度の現状

（産業・貿易・予算・行政。）（クラサオ及び属島）

第六章　オランダの植民政策止

西班牙・葡萄牙・英国・仏国は当初貴金属の獲得を主目的としたが、後に必要に迫られて開拓・貿易・移住に推移した。然るに和蘭人は当初より貿易を目的とした。その海外発展は西班牙が和蘭より多年熱帯産物の中間貿易による利益を奪はんとしたからである。而して和蘭人は通商及び航海の見地から香料産地の主人公となり、その地位を保つた。彼等が香料植物の本数を制限し、過剰生産を焼却し、毫も土人の利害を顧みず人工的に価格を引上げたのは、今日の資本家の常套手段である。和蘭植民会社の精力と能力とは驚嘆すべきものであるが、同時

に全然商人的見地に終始しては、植民地を発達せしめ、また永く之を保持することの不可能なるを思はしめる。

母国と利害を共有せぬ海外領土は維持困難である。革命戦中に和蘭の植民地が容易に英国の手に帰したのは、和蘭が海上に於て弱く、陸上に於て軍隊と軍資とを欠いた為のみでなく、土人が常に和蘭の羈絆を脱せんと望んでゐたからである。

和蘭政府は此事を知つた。会社を廃して植民地を国民の所有としてから、旧来の植民政策は改められた。特に英国が母国植民地と同様なる改革を断行したのが、植民地還付後も原則として和蘭によつて遵奉された。貿易・関税に関し、並に栽培制度の強行に関しては言ふべきこと多々あるが、之は当時破産に瀕せる母国を救済する非常手段であらう。其の後強制栽培は次第に廃せられ、土人の福祉が考慮せられ、統治の根本を力に置かず、植民地の土民と母国人との利害の共通に置かんとする傾向が、歴然として来た。かくて栽培制度全廃の暁には蘭領印度の政治は、多年の英国の印度統治と同じ様式をとるであらう。即ち和蘭の統治と密接なる利害関係ある土人君主並に土人官吏の助力の下に統治するであらう。

第七章　イギリスの仏・西両国との世界争覇

第一節　加奈陀・アカヂアの第一回争奪

北米に於ける英国植民地の発展は、当時カナダ及びアカヂアより北米の北部並に西部に伸びんとせる仏国と、